

林羅山『歌行露雪』考 (一)

林羅山(天正十一年・一五八三)〜(明暦三年・一六五七)、名は忠。僧号道春、は江戸初期の高名な儒学者として知られ、藤原惺窩の門下生で朱子学を学び、家康・秀忠・家光・家綱の侍講として仕え、昌平黌の創設者でもあった。著作は經書關係を中心とするが、史・子・集の分野等多岐にわたる。その読書は実に広領域であり、哲學關係では經学以外に「老莊」また仏教、史書では『史記』『漢書』等、文學關係では『楚辭』『文選』、『三体詩』『古文真寶』や個人の別集にも及んでおり、唐では「李・杜・韓・白」、宋では蘇東坡・黄山谷等の詩文を読破していたことを『羅山文集』によっても知ることができる。そのなかで、唐の白居易に關係のある「文」を挙げれば、「白氏文集跋」、「題琵琶行後」、「題長恨歌後」等、「隨筆」等があり、羅山の読書歴が分かる。

「白氏文集跋」によれば、那波道円から『白氏文集』を寄贈され朱で句読を施したという(七十一卷・三十冊本)。元和四年(一六二八)七月二十一日〜八月八日までの十八日ほどで、朱で句読点を附け終わるすなわち読み終わっている。「少年より老大に至るまで、読書敏捷、毎每此の如し、準じて之を知るべし」と評されており、速読には定評があった。当時羅山の手許には自筆の書写本一通をおいていたが何本であったか詳細は不明である。

白居易の作品の中で、「長恨歌」と「琵琶行」に関しては「題長恨

西村 富美子

歌後「題琵琶行後」の文が別に「題跋」項に収められているが、この両作品に関しては別の『歌行露雪』という著作がある。この『歌行露雪』は『羅山文集』には収録されていない。この書には、「題琵琶行後」は見えるが「題長恨歌後」は収められていないのである。その理由は分からないが、『歌行露雪』の「長恨歌」の末尾には別人の跋文というか読後感想的な一文が載せられている。

『歌行露雪』は羅山自筆の「長恨歌」「琵琶行」の注釈書である。その「長恨歌」の部の最後に、英甫永雄えいほうようゆうの自筆の文を載せる。永雄は建仁寺の長老で狂歌の作者としても名を知られる。福井県の若狭の生まれで、京都の建仁寺十如院の僧侶となり、後に住持となった。文禄三年(一五九四)に一時期南禅寺に出住したが、三年ほどで戻り慶長七年(一六〇二)に没するまで建仁寺住持を勤めた。狂歌以外に漢詩文の作者でもあった。

その文によれば、「十三歳でこの東山建仁寺に入り勉学に努めた。今年の冬(文禄五年・一五九六)に彼が一冊の書を持って来て見せたので、開いたところ「長恨歌」の露抄であった。「これは誰が書いたのか」と尋ねると、「去年の秋に和尚の講義の席に入って聴講したのでそれをもとに書いたものです」と答えた。わたしが熟読すると、まるで玄宗に会っているようだった。…今君が書いた事歴等はわたしの間違った説などではなく、後世恐るべきものである。十四歳で楊貴妃

の伝を書くとは。戯れに唐詩一篇を詠んで褒めたたえよう、と言って、「年少の揮毫馬鬼を憐れみ、露抄雪纂最も奇なるかな、羨みて看る子学びて他力を作すを、長恨吾れ徒だ此の才を称するのみ」という七言絶句一首を作り、「文禄五年、十一月の日、前の南禅寺の永雄」と記している。

これによって、羅山が十四歳の時に書いたものであり、十三歳の時に京都五山の一つである建仁寺に入って、その年の秋に英甫永雄の講義を聴講しそれをもとに『歌行露雪』を著したことが分かる。^⑤

仏教界に於いて建仁寺の長老と呼ばれ漢詩文・狂歌の作者としてすでに名を成していた永雄を感嘆させ、高く評価されたのである。

『歌行露雪』は羅山自筆であり、第三者による評価も高い。かつて筆者はこの書の読解を試みようとして、最初の稿をものしたことがある。その内容は実に詳細であり、経学者の羅山の注釈法は典拠を基本として精査しており、その考証は緻密である。「長恨歌」の研究史では稀有な存在であり、恐らく中国ではこうした注釈法は「長恨歌」「琵琶行」のような作品には採択しないのではないだろうか。

ただ『歌行露雪』の内容を論ずる前に、この書は先ず翻字するという作業がある。文章は、漢字・仮名(片仮名)まじりの文、漢字に送り仮名を附した文、頭注等が混在していて、その形式は一律ではない。また朱による句読点が羅山によるものか後人によるものか等、先に解決しなければならぬ問題が山積している。最初の稿を書く前に、微細な部分は残しているが一応これらの諸点を除いて大体の翻字の作業を終えていた。

本稿は、少し歩を進めて『歌行露雪』の内容を紹介する段階の第一歩としたい。

歌行露雪

肅宗皇帝、名は亨、玄宗の太子なり。禄山の乱に因りて、乃ち靈武に

即位し、其の後克く西京に復して、旧物を失わず、在位すること七年、寿五十二にして崩す。肅宗靈武に即位し、玄宗を尊びて上皇と曰い、至徳と改元す。至徳二年十二月、上皇咸陽に至る、上法駕を備えて、望賢宮に迎う。上皇即日、興慶宮に幸し、遂に之に居る。上表して避位を上表して、東宮に還る。上皇許さず。至徳は、肅宗即位の年なり。至徳元年は、即ち天宝十五年なり。天宝十五年正月、禄山自ら大燕皇帝と称し、聖武と改元す。聖武は本と禄山の年号なり。肅宗之を用いず。至徳二載、丁酉春正月、安禄山兵を起こしてより以来、目漸く昏く、是に至りて、復た物を覩ず、性は益ます躁暴、嚴壯と安慶緒と謀りて、夜闔豎の李楮兒をして刀を納れ直ちに帳中に入れしめて、禄山を斫らしむ。腹腸流血して、遂に死す。慶緒尋いで即位す。

默齋陳氏曰く、禄山臣を以て君に叛き、慶緒は即ち子を以て其の父に叛く。天道好還、豈に昭らかならず、昭然万世の戒と為すべき哉。

慶緒が祿山を殺す。時に、肅宗、内々に入洛の用意にて、鳳翔まで打ち出でて祿山が殺されたことを、聴いたとあるぞ。そうして回紇王俶郭子儀等を引きつれて、鳳翔を發して、長安に至りて、賊を撃ち、賊を切りくづして、大軍西京(長安のことなり)に入る。それから洛陽に到りて、勝ったほどに、慶緒がたまらいて保鄴と云う所へ、落ちていったり。其の年、上皇蜀郡を發して西京に還るとあり。至徳三年戊戌、改元して、乾元元年、郭子儀を指し向けて、安慶緒を討たさしむ。

乾元二年、史思明兵を引き、慶緒を救うあれども、慶緒の兵、鄴に潰れ、思明慶緒を殺し、范陽に還り、僭号して仍ち大燕皇帝と号す。乾元三年は上元元年庚子なり、あくる二年辛丑、思明猜忍好んで群下の小を殺すこと意の如し。動もすれば族に至るも人を誅し、自ら其の部將駱悦を保たず、之を縊殺す、朝義帝位に即く。朝義は思明の長子なり、寵無く小子朝清を愛して常に朝義を殺して之を立てんと欲す、故に是の謀有り、あくる年の宝應元年九月に即くに朝

義を討ち、敵の根きりをされたぞ、上皇も此の年崩御あるぞ、以上十如院本

(一)

長恨比巴の抄、古来仮名抄ばかりにて、粗精の処は、ゆきたらず、是の故に、世人未だ奥議を知らざるか。殊更、和歌執心の人、之を知らざるべからず。近代未だ唐書の全本を見ず、故に委細の事、誰も未だ詳らかなるを知らず。伎是の拔萃を、引き会わせて、之に注するものなり。遺漏必ず多からん、右他說、

(二)

長恨歌琵琶引は、高辻の家、之を講読す、高辻は、菅丞相の末流なり、

(三)

唐玄宗の開元元年癸丑は、日本四十三代元明天皇の和銅六年に丁たる、天宝十五年は、則ち肅宗の至徳元年なり、日本四十六代孝謙天皇の天平勝宝八年に丁たる、

(四)

菅丞相、延喜三年癸亥、春二月廿五日、筑前安楽寺に薨ず、此の年五代哀帝の天祐元年、天宝十五年と相い去ること百四十八年ならん、

(五)

白楽天と云う能に、日本へ来朝する由、見えたり、何の伝記にありとも未だ見ざるぞ、いづれも蓬萊の仙人の内の、化者とは見えたぞ、然ると雖も、白が詩に、蓬萊は吾が帰処にはあらず、帰らば、都率天上へ、いなんと云う、詩を作った、事あり、蓬萊島の列班の人なるに、よりて、日本国へ来渡せると云うか、唐より蓬萊を指して東と為すなり、又た宋濂が日本国に楊妃の祠有りと、など云うを以て見れば日本に、来ると云うも、虚偽の様にて、又たありもするらんや、右他說、

(六)

白氏文集、卷第十二感傷の部にあり

長恨歌 古文真寶前集、第八卷、之を載す。

説文に歌は詠なり。徐曰く長く其の声を引き、以て之を誦するなり。釈名に人の声を歌と曰う。柯なり。声を以て吟詠す。草木の柯葉有るが如し。韻会

詩詳玉屑卷第一に、法度を守るを詩と曰う。始末を載せるを引と曰う。体行書の如きを行と曰う。情を放するを歌と曰い、之を兼ねるを歌行と曰う。蛩蛩悲しむが如きを吟と曰う。俚俗に通ずるを謳と曰う。委曲して情を尽くすを曲と曰う。長恨の解、詳らかに末句に見ゆ。

〔頭注〕歌行の体、後に見ゆ。

(一)

白居易 白楽天とあるが可なり。字は楽天、其の先は太原の人、華州下邳に徙る。大歴七年壬子に生まれ、貞元十四年、時に年十七にて、進士の第に登る。詩に云う、慈恩塔上名を題する処、十人中最も少年なりと。晩年意を詩酒に放ち、東都履道里に居り、沼を疏し樹を種え、石楼を構え、香山に八節灘を鑿ち。自ら醉吟先生と号し、香山居士と称し、詩数千篇を吟じ、元稹と酬詠多く、元白と号す。翰林学士と為り、会昌の初めに卒す。年七十五、洛陽の竜門山に葬らる。詳らかに後に見ゆ。

〔頭注〕白氏文集第一卷、元稹序す。其の序、居易が伝も則ちあり。文多き故に、之を書くに遑あらず。

(二)

漢皇重色思傾国、御宇多年求不得

本注に、明皇、傾国美貌の婦を得んことを思い、敢えて唐君を斥さず、漢を借りて喩と為す。漢皇、漢の武帝を借りて謂うなり。王建綺岫宮の詩に、武帝去来紅袖尽き、野花黃蝶春風を領す。天隱の注に、武帝は玄宗を謂うなり。豈に此の謂いならず哉。重

林羅山『歌行露雪』考 (一)

色、文選十九卷、登徒子好色賦。傾国、漢の李夫人の伝に、李延年歌いて曰う、北方に佳人有り、絶世にして独り立つ、一たび顧みれば人の城を傾け、再び顧みれば人の国を傾く。東坡の詩、八巻の湯泉の詩に、城を傾く浴無きと雖も、幸いに亡国の汚を免る。注に、城を傾くとは楊妃を謂い、亡國とは明皇を言うなり。太全の本注に、御は臨治也。天下の地を宇と曰う。猶お君の天下に臨むを言うが如きなり。韻会に天子の止むる所を御と曰う、云々。周興嗣の千字文に、天地玄黄、宇宙洪荒。注に天は能く万物を覆い、形は屋宇の如し。又た上下四方を宇と曰う。古文句解に宇内を臨御し、歴年已に多く美色を求むるも得べからず。明皇名は隆基、睿宗の第三子、母は昭成皇后と曰い、竇氏なり。在位四十三年、寿七十八。先天一年、開元二十九年、(元年癸丑、十二年甲子)。天宝十四年(元年丙申)。三体詩の目録、之を詳らかにす。

〔頭注〕毛詩一、関雎に云う、之を求むれども得ず、云々、(三)

楊家有女初長成、養在深閨人未識

本注に、楊玄琰の女、小字玉環。楊玄琰、字は温卿、生まるること数歳、未だもの言わず。相者視て語遅きは、神定まり、必ず重器なりと曰う。中宗即位し、以て二張を誅して功有り、弘農郡公に封ぜらる。排韻丁未。楊妃外傳に、貴妃蜀に生まる、嘗て誤りて池中に墮つ。後人呼びて落妃の池と為す。類説一。韻會上声、長は大なり、養なり。句解に、養育されて閨房の内に在り、人見るを得ず。

〔頭注〕楊妃并○大明一統志

※〔解説〕

- (一) 肅宗皇帝
- (二) 長恨・比巴之抄
- (三) 長恨歌・琵琶引
- (四) 唐玄宗…
- (五) 菅丞相
- (六) 白樂天(能)

〔長恨歌〕(一) 長恨歌

(二) 白居易

(三) 漢皇重色思傾国 御宇多年求不得

(四) 楊家有女初長成 養在深閨人未識

※『歌行露雪』の注釈文には、誤字、謬説等また文章の意の通じない箇所もあるが、今回は修正をせず『歌行露雪』原本のままとした。

※『林羅山に於ける白居易』―序論― 東海学園 言語・文学・文化 第二号 平成十四年十二月発行 西村富美子

○

小林先生の「追悼号」にこうした拙文を寄せるのは、あまりそぐわない気持ちもあるが、少し理由があつてやはりこの一文にすることに。最初の論文を執筆してから早くも十数年の月日が流れている。『歌行露雪』はその二、三年まえから調査をしていたもので、資料の確認のため何度か公文書館(内閣文庫)に通っていた。少しずつ段階的に論文にまとめようと考えて、東海学園大学に異動した年に前稿の『林羅山に於ける白居易』を執筆、投稿したものである。それから間もないころ廊下ですれ違った折に、「はいはい」などと気軽に返事をしてしまった。手持ちの材料は揃つてはいたのだが、ちょっと事情があつて次号から方向転換をしてしまいもとに戻れないまま今日に至ってしまった。今回は先生の「追悼号」とのこと、微々たる量ながら「統篇」を何とか書いて、哀悼の意とともに約束不履行の印にすることにした。近き将来、どこかでお目にかかる機会があれば「ほんの少しだけですが」のご挨拶と一献傾けつつ文学談議に花を咲かせたいと願っています。

永遠の文学青年小林先生を偲んで